

## 研究科内公募プロジェクト

### 乳児期の食器操作の発達過程

#### : 学校教育における食育促進カリキュラムの基礎として<sup>1)</sup>

代表 青木 洋子 (教育心理学コースD3)

山本 尚樹 (教育心理学コースD3)

指導教員 佐々木 正人 (教育心理学コース 教授)

#### 研究の背景

ヒトの食事には様々な道具が使用され、発達初期の食事の課題の一つに操作技能獲得が挙げられる。食事の技能はゲゼル (1952) による食事全体の技能発達に加えて、スプーン (Connolly& Dalglish, 1989) や箸 (伊与田, 1996) など個別の道具操作は運動機能の発達と関連付けられその詳細が明らかとなっている。

食事研究のもう一つの大きな流れに子どもが社会・文化的活動に参入していくことを発達と考える社会文化的アプローチが挙げられる。食事を養育者と子どもの共同行為とみなして、発話などの社会的相互交渉に注目する。例えばスプーンの操作では、大人の援助は最初スプーンに食物を乗せるなど行為によるものの割合が多く、やがて援助の90%以上が言葉かけになるのだが、この変化は子どもの拒否行動の現われに対応している (河原, 2002)。また大人は子どもの摂食の状態に合わせて食器具を子どもに近づけたり遠ざけたりして食事を制御する側面もある (外山, 2008)。

ある対象が道具として使用されるまでの過程は存在論的アプローチで取り込まれている。生態心理学者のリードは、生まれて間もなく不完全に把握されていた環境の意味は発見し利用され、その過程は進化するもの (リード, 2000) と仮定している。この観点から乳幼児期の食器操作を検討したところ、食器に偶然食物が入る (a)、テーブルと食器内で食物をいじる (b)、食器に食物を入れる (c)、食器から出た食物を戻す (d)、食具を

置く (e)、食器間で出し入れする (f)、食器内で入れ替える (g)、食べる食物を入れ、食べない食物を出す (h)、食べた後の食物を食器に戻す (i)、自分の食器に食物を入れる (j)、の10種類の食器利用のカテゴリーが得られた (青木, 2011)。観察当初に現れた (a)、(b) のカテゴリーに該当するエピソードでは乳児は食器とテーブルを区別しているようには見えず、積極的に食器に何かを入れる様子は見られなかったが、主に (c) から (j) では「他の対象を収める」食器の特性が利用されていた。

アリストテレスの「実体主義 (Substance Ontology)」は「メゾスコピック (Mesoscopic)」と呼ばれる中間サイズのことを指し (加地, 2008b)、彼は「哲学における最も中心的分野としての『第一哲学』の地位を『存在の存在』について考察するという課題を果たす学としての存在論に与えた。 (加地, 2008a : p4)」。この存在論の観点から加地 (前掲 a) は、穴はそれ自身が独立で存在することができず穴を有する物体 (ホスト) の存在を必要とするため純然たる実体ではないが、実体に近い性質を持つことから「実体的対象」と呼んでいる。食器は本体がホスト、食器の窪みが穴とみなすことができる。また穴の境界は、内臓や腕、脚など機能や形態によるおおよその区切りはあるが確定的境界がない「非分離部分 (undetached part)」になぞらえることができる。この境界は私たちが任意に設定しているものに過ぎないと言われる (加地, 前掲 a)。食器の中でも外でも食物を

いじっていた時期の食器の穴は外部のテーブル面まで連続していた。やがて食器に何かを入れるようになると、食器の穴はほぼ食器の形状と一致し、仕切りのある食器の中で入れ替えを行うようになると、穴は更に細分化したと考えられる。このように食器とテーブルの分化は、存在論的に穴の境界の変化として解釈することができた。

### 本研究の位置付けと目的

本研究では、次の3つの理由により存在論的観点を採用した。1つ目は発達初期に現れる手の活動と後の道具使用は連続的に捉えられるべきだというLockman (2000) の主張である。食器具操作技能の発達研究は通常後者にのみ焦点を当てている。2つ目として、社会文化的アプローチでは社会的相互交渉を分析対象としており物理的対象との相互作用は検討の余地がある。「子どもを取り囲むさまざまなモノは大人の意図のもとに選択、配置されており、その意味で文化的に構成されたもの(外山、前掲:p. 233)」であることから、本研究では物理的対象を大人の社会的・文化的な相互交渉を含んでいるものと考え、子どもの物理的対象との相互作用を既存の社会文化的アプローチの知見を補うものと位置付けた。3つ目として存在論的アプローチの先行研究は乳児1名であり、対象児を増やして再検討する必要がある。そこで本研究では先行研究の枠組みを用いて、一般化できるカテゴリーの同定を行うことを目的とした。

### 各章の概要

1章では以上のように食事研究の3つの観点を概観し、本研究の位置付けを行った。2章では、都内保育園の0歳クラスの男児2名(いずれも観察開始時11ヶ月齢)の食事を10ヶ月間縦断観察し、先行研究と同様の手続きで食器に対する接触を操作として動詞でラベル付けを行った。11ヶ月、15ヶ月、20ヶ月の3点が分析対象となった。観察された操作は合計30種類で、今回新たに〈手を入れ

る〉と〈傾ける〉が観察された。先行研究で観察期間中増減の割合の高かった〈入る〉、〈入れる〉、〈戻す〉、〈食具を入れる〉操作の出現時期は、先行研究と同様の傾向が見られた。〈入る〉は2名とも20ヶ月時には観察されず減少していくものと考えられた。また1名の〈入れる〉が本研究の3時点で、もう1名は15ヶ月と20ヶ月の2時点で観察され、13ヶ月以降長期間〈入れる〉が観察された家庭での食事と類似する結果が得られた。

〈手を入れる〉は家庭では観察されず、その明確な理由は分からなかった。〈傾ける〉も家庭では観察されなかったが、〈固定する〉や〈回す〉に動きが類似しており、分類上の問題と考えられた。

3章では質的分析を行なった。先行研究の食器利用の10のカテゴリーのうち7つに該当するエピソードが確認された。「プレート間で入れ替える(g)」はプレート使用が一度もなく該当するエピソードもなかった。「食べるものを入れ、食べないものを出す(h)」も観察されず個体差が影響するカテゴリーと推測された。「自分の食器に食物を入れる(j)」は自分と他人の食器の区別だと考えると、Oの15ヶ月時に関連するエピソードが出現していた。

4章では2章と3章の結果の総合考察を行った。2章の分析は3時点のみの比較だったため、課題が多く残った。3章で先行研究と共通して観察された食器利用の10のカテゴリーのうち7つは、今後食器操作の発達研究の指標として用いることが期待された。また今回出現しなかったカテゴリーについて、〈取り出す〉など他の操作から観察できる可能性を議論した。最後に道具操作技能の発達や社会文化的アプローチで取り組むことが適していると考えられる、本研究で観察された湯呑みで水を飲むエピソードを紹介し、それぞれの観点で多層的に問題を捉える必要性を主張した。

### 注

1) 本プロジェクトタイトルは「幼児期」である

が、研究計画の変更に伴い、報告書のタイトルを「乳児期」に改めた。